

することに資する点で、戦後日本の思想空間全体を考える基礎とも成り得ると答えた。すなわち「帝国」および「天皇」という存在を前提とした戦時中の日本仏教研究が、敗戦後、如何なる枠組において再構築されていったのかを検討することを通して、仏教以外の分野にも通じる成果を提示できるということである。

また各自の発表に対しても質問がなされ、それぞれが応答した。桐原発表に対しては、服部における三木清理解の妥当性が問われた。これに対し桐原は、服部と三木の親鸞理解にはズレが存在しており、その三木解釈には当時から羽仁五郎などによる批判が存在していたことを指摘し、本発表はあくまで服部の思想であることを付言した。ワルド発表に対しては、『葬式仏教』のみを取り上げることで、圭室の学問全体を語ることが可能かどうか、という質問がなされ、彼は、それが確かに困難である、と答えた。今回は、時間制限のため、あえて、代表作のみに焦点を当てた。圭室による「日本仏教史」そのものを究明することは、今後の課題であるとも述べた。碧海発表に対しては、五来が自己の学問の総称を「仏教民俗学」から「宗教民俗学」へと次第に移行させていったのはなぜか、という質問がなされた。これに対し、五来は仏教よりも庶民信仰の主体性をより重視する傾向が後年になるほど強くなってきたためである、等の応答がなされた。

質疑応答に際しては、フロアからも示唆に富んだコメントや質問が寄せられた。敗戦という体験によっても、学問的な方向性にほとんど変化がみられないような人物をどのように考える

べきか、すなわち本パネルが、断絶という側面を重視する余り、連続性を見逃しているのではないか、という指摘がなされた。さらに本企画が、歴史研究に取り組んだ人物を中心としており、仏教の哲学的考察に取り組んだ者に焦点を当てた場合には、また異なる時代像が見えてくるのではないか——等々である。これらに対してパネリストは、まず日本仏教の語りの中心が仏教学から歴史学へと移行したという構図を示し、さらに敗戦前後において当人の思想自体に大きな変化がないとしても、戦後にその主張が主流になったということから、そこに時代と社会の変容を見ることができるとであろうと質疑を結んだ。

宗教における死生観と超越

代表者・司会 高田信良

コメンテータ 氣多雅子

宗教的信における超越とその構造——諸井慶徳の宗教論——

澤井 義次

今回の研究発表では、天理教学者で宗教学者でもあった諸井慶徳（一九一五—一九六一）が、宗教学的に考察した宗教的信の本質構造を明らかにし、そのうえで死生の意味をめぐる彼の天理教教義学的視座を探究したい。諸井慶徳は奈良県天理市に生まれ、東京帝国大学宗教学宗教史学科および同大学院に学んだ。後に天理教山名大教会長を務め、天理大学の初代宗教学科

長やおやさと研究所長、さらに天理教校長などの要職を歴任した。著書として『宗教神秘主義発生の研究』（東京大学へ提出された文学博士論文）のほか、『宗教的主体性の論理』や諸井慶徳著作集（全八巻）などがある。彼の宗教研究の特徴は、宗教学研究が天理教教義学と密接不可分に連関していたことにある。

諸井は世界の宗教現象や宗教思想を踏まえて、宗教的信の本質構造論を宗教学的に展開した。まず、人間存在の主体的あり方を「信においてある」あり方として捉えた。彼の宗教論における本質概念は「神的存在」であった。また「信が先にあって、しかる後に神的存在が指定されたものではない」として、宗教的信と「神的存在」の本質的相即性を強調した。宗教的信における「二つの超越性」、すなわち「上への超越」と「下への超越」は円環的な関係性にあり、「超越的な絶対的次元の存在に対する信仰は神秘主義の何よりの基盤でなければならぬ」と述べ、信仰がすでに神秘主義の根柢に確立されているという。

また人間存在を「場界的存在」としても捉えた。「場界」(FeldWelt) について、彼はハイデガーの言葉を援用して言う。それは人間存在が「そのために（配慮し）」「そこにおいて（あり）」「それへ向かって」存在者を出会わしめるものである。「場界的存在」としての人間存在には、その動態的構成の根柢(Urgrund) に、二つの構成要素すなわち「欠如性・欠陥性」と「拡充性・充足性」があり、それらは相互連関している。また超越性を「横的超越」と「縦的超越」に分けて、「場界それ自体の超越」を意味する「縦的超越」の働きは、まさに「根源

存在」(Urgrund) の方から働きかけられるという。諸井にとって「原宗教」(Ureligion) は「究極的にして根源的な信の展開」であり、宗教は「かかる高次の場界においてある人間主体の事実展開の諸相」である。このように諸井の宗教論では、「根柢」(Urgrund) が鍵概念をなしている。「原初」を示す接頭辞 Ur (ウル) を布置して、存在の根源性、あるいは生の根柢を認識することの重要性を強調した。

こうした宗教的信に関する議論を踏まえて、死生の意味をめぐる諸井の天理教教義学的視座を考察したい。彼は天理教の三原典の内容にもとづいて天理教教義学の樹立を目指した。天理教の教義では、親神による人間世界創造の目的は「陽気ぐらし」世界の実現にある。人間は親神の守護によって生かされて生きているが、死は「出直し」として教示される。「出直し」とは人間が親神から借りている身体を親神に返すことを意味する。しかし諸井の言葉によれば、「死は決して人間の真の生命の終末なのではない」。死は「一つの転機」にすぎない。魂は生き通しであり、また再び後に別の身体を借りて生まれ替わってくる。人間存在の生命は、ただ死をもつてすべてが終るのではなく、「陽気ぐらし」世界の実現に向けて、生まれ替わりを繰り返していく。これが人間の生きる場としての生の「根柢」である。諸井は言う、「およそ根柢とはその成り立ちの始元を知るものによって教えられ、告げられてこそ初めて知らされるべきものである」。

諸井は救済への経路を示すものが宗教の教説であると言う。救済とは「神的存在」の方からの働きかけによる「絶対的生命

転換の境地そのものである。彼の宗教の本質構造論では、宗教的信における超越と生の根柢の認識が密接不可分に連関しているのである。

危機の体験と死生観の形成

——現代日本におけるキリスト教理解——

中村 信博

まず、事例として佐原英一牧師（一九四四—二〇〇八年・日本基督教団京都葵教会）の実践的な牧会とその背景および影響について紹介する。次いで、ドイツ敬虔主義が近代プロテスタント史において果たした役割について言及し、佐原牧師に類型化される現代日本におけるキリスト教が、ドイツ敬虔主義の背景とそれがおよぼした影響に通底する特質を備えながら展開してきたものであることを明らかにする。これによって、現代日本におけるキリスト教は多くの先行研究が論じてきた神学者や特定の聖職者の信仰理解に匹敵する死生観を内在しながら、いわば多くの無名の信仰者によって形成されてきたものであることを実証と仮説とによって論じる。

日本基督教団京都葵教会におけるおよそ三〇年におよぶ佐原牧師の牧会は、ほぼ一〇年周期で初期、中期、晩期に区分することができる。一貫して「悲しみを負うひとびと」を視野においた牧会活動であった。もちろん、この事実が、聖書の隣人愛の実践や、イエス・キリストの十字架における苦難を根柢とした、牧師として当然の働きであったと推論することも可能であろう。けれども、「心臓病の子どもを守る京都父母の会」との

共同による「パンダ園」（自主保育施設）を教会内に設置したことや、多くの青年、信徒たちに私生活を投げ出すようにして継続された牧会活動によって影響を受けた者は、質と量において群を抜いているとされる。

その背景には、佐原牧師の際だった終末論的信仰が指摘されるべきだろう。若い日に幼い次男を失った経験は、イエス・キリストの苦難についてだけではなく、「悲しみを負うひとびと」との距離を近くし、宣教論の内実を「共感」という精神行為に変えたのではないかとおもわれる。佐原牧師がめざした牧師像は、困難の途上にあるひとびとに同伴者として沿い続けることであり、また、牧師として教会を「悲しみと困難の共同体」として形成することにあつた。それはまた、狭義での信仰の有無にとらわれない、一般社会と境界のない（越境的）教会の姿をも提示している。いっぽうで、それを徹底すれば、教会共同体を非聖域化してしまうのではないかとの批判にさらされかねないものでもあつた。

とくに神学的著作を残さなかったひとりの牧師の営為は、体験的で偶発的なものに過ぎないのだろうか。そこに内在するキリスト教理解の理論を抽出することは不可能なのか。本発題においては、佐原牧師の牧会活動に直接影響があつたとはおもわれないドイツ敬虔主義の成立事情とその背景について比較論的に一瞥することで、この点を理解するための一助を得ることができるかと仮定した。

知られているように、ドイツ敬虔主義は、F・シュペーナーによる家庭での集会（*collegia pietatis*）を起源とし、近代プ